



# なかさとじょう 中泊町中里城遺跡～蝦夷の区画集落～

## 遺跡位置・調査経緯

遺跡は中里町の中心部、津軽平野を一望する中里川左岸標高約 50m の丘陵上に立地します。沖積地との比高差は約 40m です。周辺には、五林遺跡・一本松遺跡・胡桃谷遺跡という 3ヶ所の壕を伴う古代区画集落跡が存在します。

昭和 63 年～平成 9 年（1988～97）中里城跡調査会（村越潔会長）・中里町教育委員会などによって、発掘調査が行われました。

## 「蝦夷」と古代集落

中里地域の本格的な開発は中近世以降のことですが、その起点は平安時代に遡ります。10 世紀初頭、大沢内溜池周辺や、深郷田・宮野沢・五林など、現在の集落が広がる低い台地に、古代集落が続々と出現しました。当時の北奥は国家の管轄外であり、そこに住む人々は「**蝦夷**」と呼ばれていました。中里地域において古代集落を開いたのも、「**蝦夷**」と称される人々と考えられます。

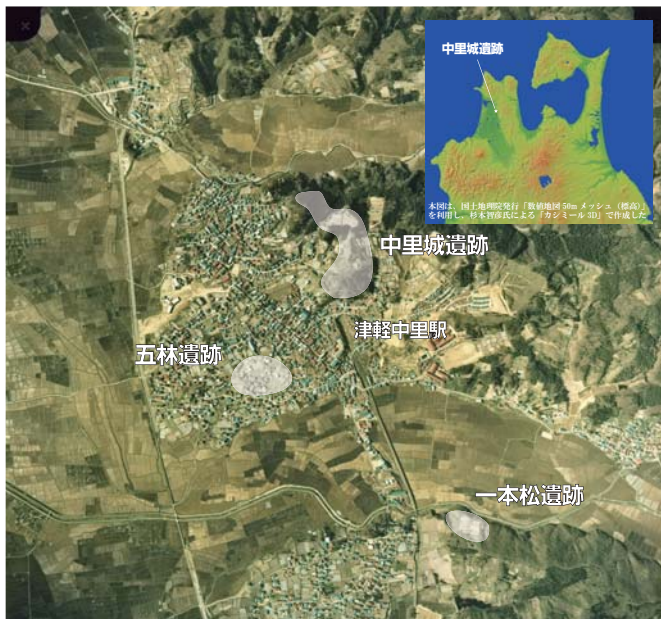
## 「区画集落」の出現

古代集落が出現してから約半世紀、10 世紀後葉には再び大きな変化が訪れます。低い台地につくられた集落の多くは放棄され、人々は標高 30～50メートルの一段高い丘陵部に移住を開始します。高所につくられた集落は、壕や柵で囲まれ、容易に侵入できない構造になっており、「**区画集落**」などと称されています。

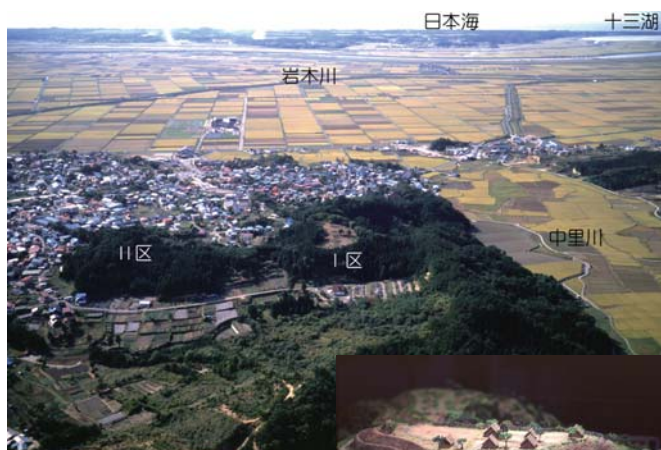
稲作や漁撈等の生業に便利な低地から、高地へ移転する動機については、土地・水・交易利権等を巡る「**蝦夷**」同士の争いとする説が有力ですが、異論も少なくありません。

## 中里城遺跡の発掘調査

中里地区では、このような古代の「**区画集落**」が 10ヶ所前後確認されています。なかでも



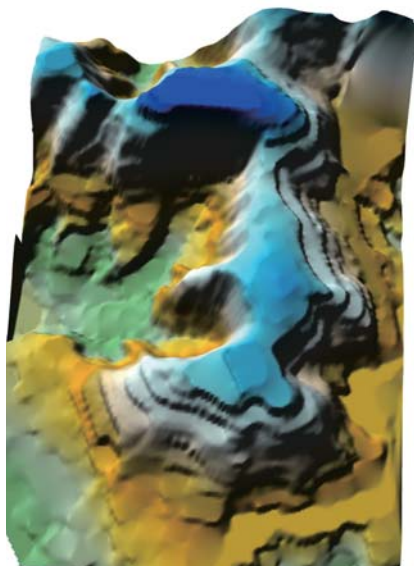
遺跡位置



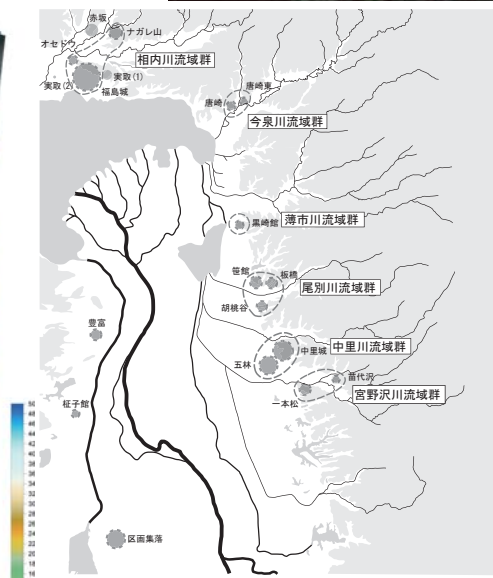
遺跡全景



区画集落模型



3D モデル



中里地域の区画集落





規模・標高ともに卓越し、岩木川下流部を代表するのが、県史跡中里城遺跡です。発掘調査によって、縄文前期・平安・室町・江戸各時代の遺構遺物が発見され、なかでも平安時代が主体を占めることが明らかとなりました。

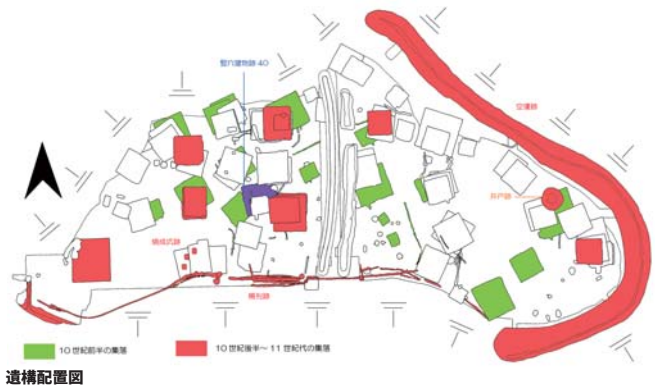
平安時代の集落は、一時期10棟前後の**竪穴建物跡**から構成され、全8期にわたる変遷が推定されますが、後期(10世紀後～11世紀前)には**柵列・空壕**等の区画施設を伴う「区画集落」へと変貌を遂げます。竪穴建物群の周囲に廻らされた柵列跡は全長約85m、空壕跡は全長約130m、幅約5m、深さ約3mに達する大規模なものです。

### 主な出土遺物

在地産の土師器・須恵器に混じって、北海道に起源をもつ**擦文土器**が大量に出土しました。擦文土器は、北海道南西部と共通する文様構成のものが多くことから、岩木川-十三湖-日本海を介して、北海道との交流が盛んに行われていた様子がうかがわれます。

一方**炭化米**や**靱痕土器**、200個以上出土した漁網用**土錘**の存在は、稲作や内水面漁撈が生業の一端を占めていたことを示します。また**羽口・鉄滓・砥石・埴埴**など精錬・鍛冶関連遺物や、**錫杖状鉄製品**をはじめとする各種鉄製品の出土も注目されます。

中里城遺跡を含めた「区画集落」は、**奥州藤原氏**が北奥を支配する平安時代後期12世紀までには終焉を迎えます。同集落の消滅は、中世社会の幕開けとともに、中里地域が国家の領域に含まれたことを意味する重要なエポックといえるでしょう。



竪穴建物跡・復元模型



1997空壕跡断面



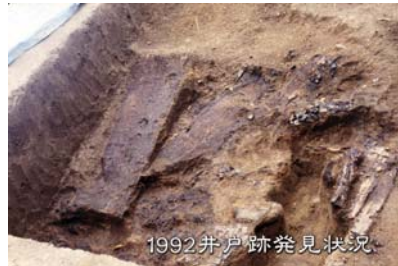
1997空壕跡



1992井戸跡調査



1997調査風景



1992井戸跡発見状況



1991竪穴建物跡18出土遺物



1991竪穴建物跡40出土遺物